

沼尻絰一郎編輯
西南鎮靜記

三
号

上

二





沼尻桂一郎編輯全三冊



西南鎮靜記

東京 萬笈閣發兌



48-7810



甲第二十号

明治四年辛未秋廢藩更ふ四鎮臺被置候
節元諸藩より召集の諸兵下士以下功勞
と被賞同八年六月一日より向き二ヶ年
間一人口賞典米下賜の者ふて先般臨
時召集現今服役中の者賞典米下賜斯
限既ふ相満候得共右服役中ハ是迄通一
人口宛下賜候條此旨相達候事

陸軍卿山縣有明代理

陸軍少將井田讓

明治十年七月十三日

西南鎮靜記

三編上二一

徳久孝次郎

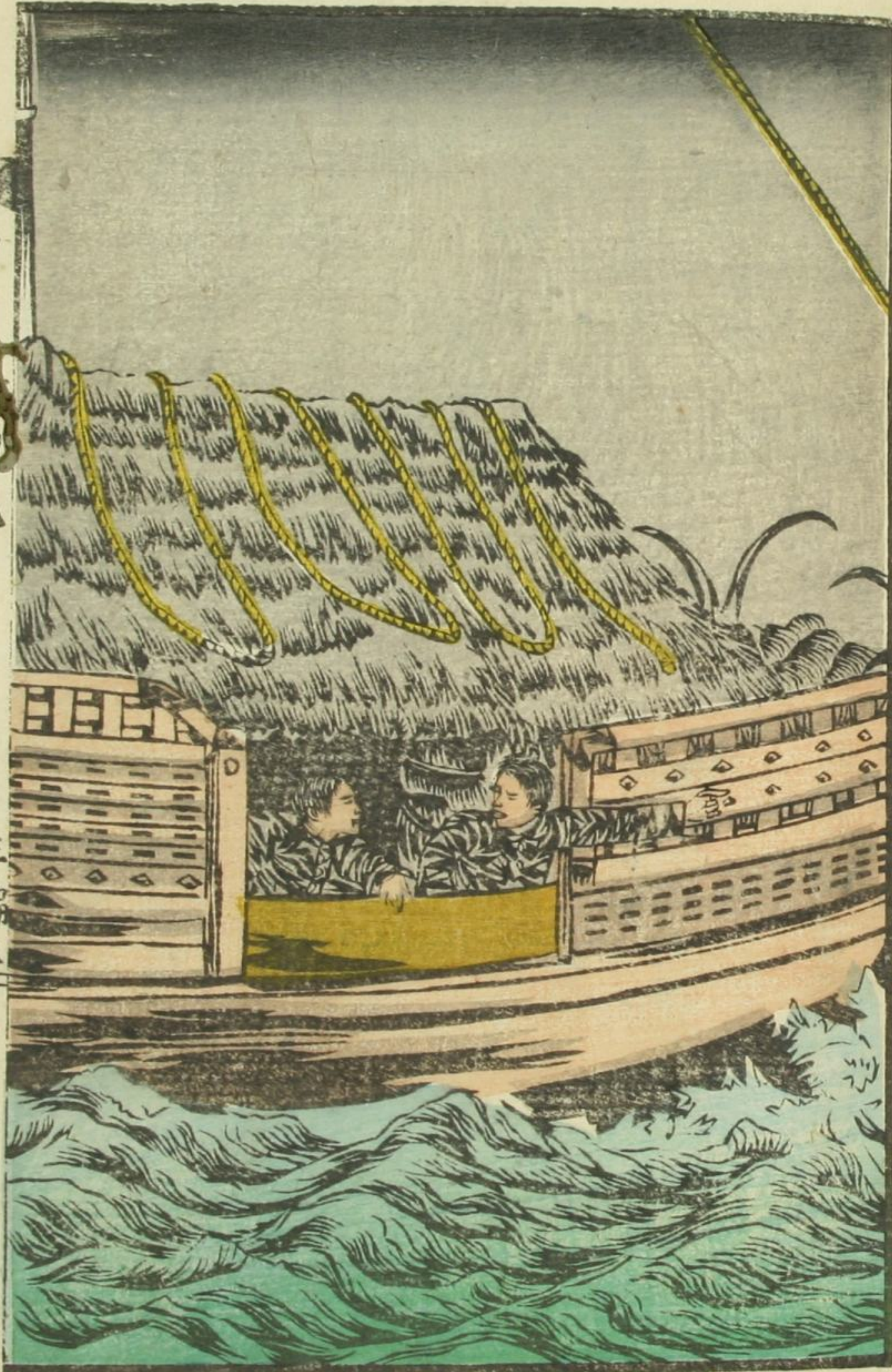


前原一格

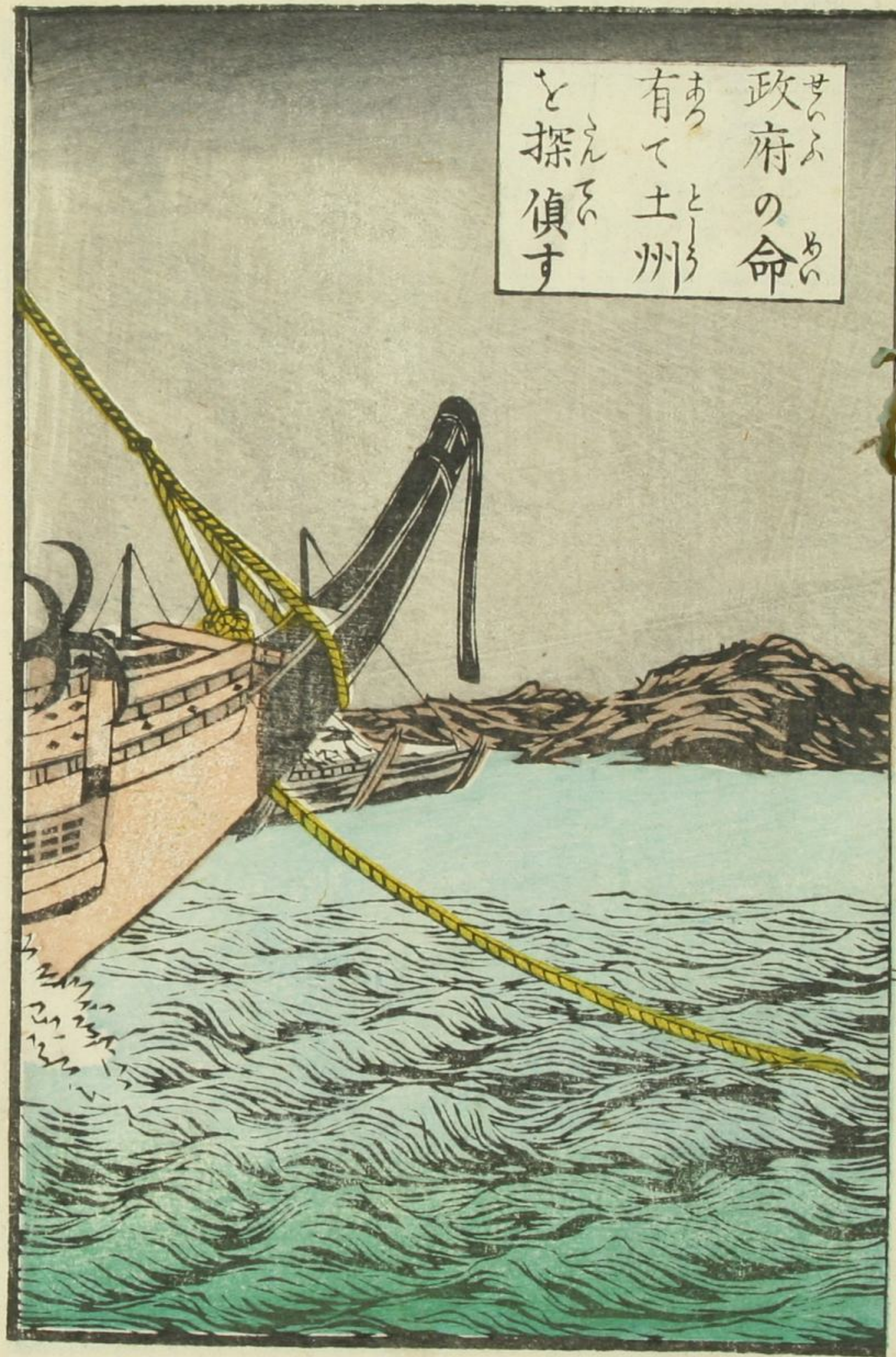


石井武之助

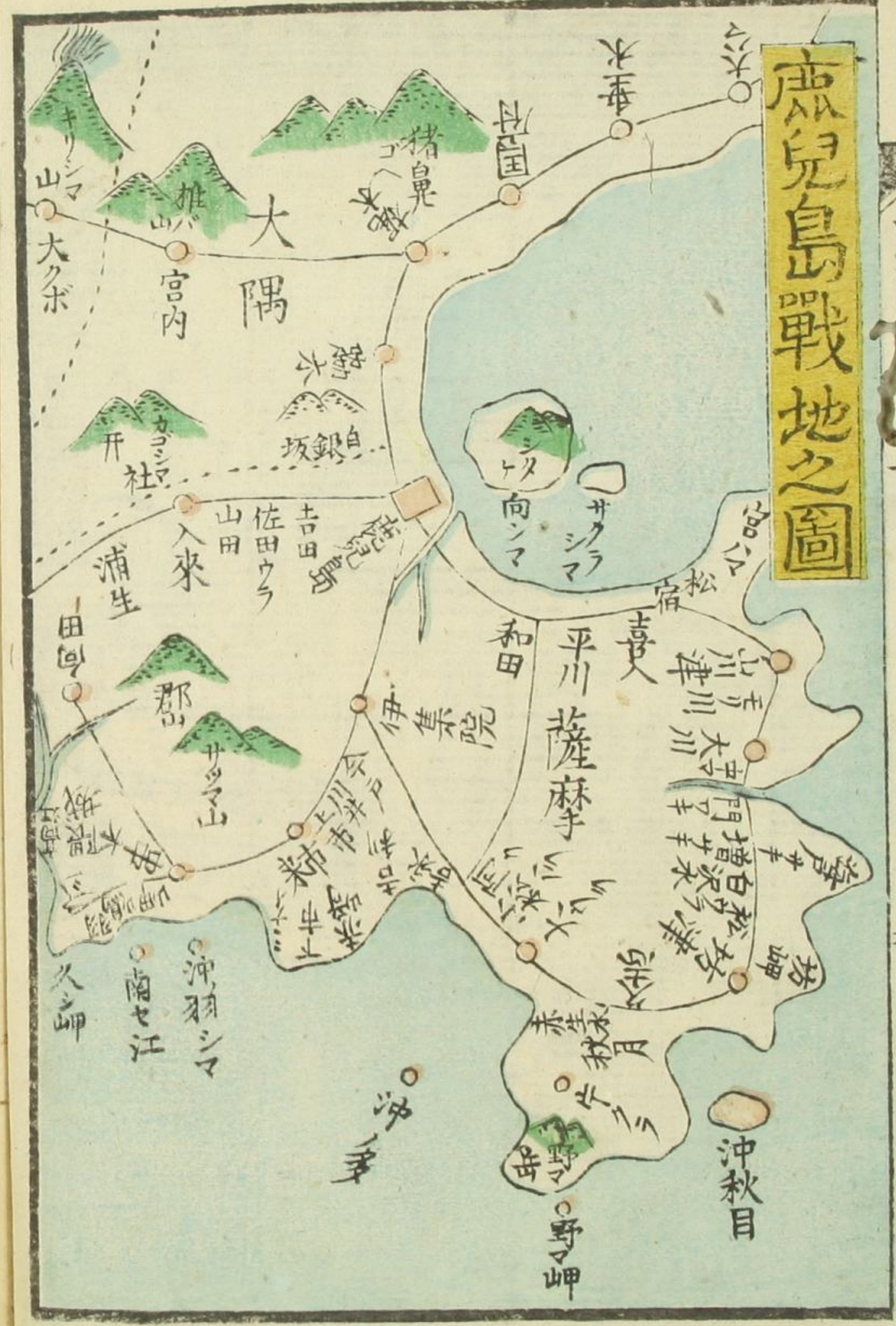




政府の命
ありて土州
と探偵す



鹿兒島戰地之圖



西南鎮靜記三編卷之上

東京 沼尻絰一郎編輯

第五回

官軍諸道より叛境に迫る
并羽瀨郷田両逆長降伏す

却説鹿兒島を爾來官賊兩軍相對峙し々
より戦争ありと人ども川路少将が肥後路
の賊徒を掃攘為しと連絡と通ぜられたる
後一層官軍の銳氣と倍一賊兵の威焰

ハ幾分衰へたるヨ相違なるベシ然
れども今日猶戦ひを挑むハ豊後の一方に
シテ此の手の官軍マア進撃一賊と日
向大隅の間ハ退縮セーむるハ實マア二
通りの勞力マアあらずシテ近ク六月十四日
以来重岡街道と進撃の部署ヨ詳細聞ク
ハ旗返シハ大砲一門歩兵第十三聯隊第
一大隊同第六聯隊の内一中隊工兵第六

小隊のうち一分隊此指揮官ハ福原陸軍大尉ハ
シテ久部口ハ警視隊三小隊此指揮官ハ秋原
大警部たり三國峠口ハ歩兵第十四聯隊第三
大隊第三旅團歩兵第六聯隊のうち一中隊工
兵第六小隊の内一分隊此指揮官ハ青山陸軍
少佐たり援隊ハ歩兵第十三聯隊第二大隊
此指揮官ハ林陸軍少佐たりマア總指揮官
ハ川上陸軍少佐トシ梅津越葛葉峠攻撃の

配布の五番小隊左半隊右翼の迂廻兵半隊
 長と高橋種樹と一々同右半隊正面より進撃
 する兵の小隊長の高倉義光と一々一番小隊
 左翼の迂廻兵小隊長と日野重晴と二番
 小隊右半隊旗返一三國峠の押へ小隊長を
 平田武雄と一半隊長と藤田五郎と一同左
 半隊木浦口の押へ分隊長と遊佐正人と定
 められ十四日の午前四時霧の深きと幸ひ

と一山岳を攀敷澤を渉り賊壘敷ヶ所を
 陥れ入れんと大小砲を連發するも賊の出没神
 速一深霧中ありて敢て形蹟を露へさ
 ず或は突然官兵の後ろは頭れありひの隠然
 と一霧中匿る茲にあいて官軍大砲
 撃する目的は窺一と一時の苦戦あり一
 ども稍蔽ひ霧の晴るゝと當りて漸やく
 み一壘を陥れ入るゝと火を數ヶ所よ

放つて諸隊は是を報ト兵威ましく奮ふ又
警言視隊中より東京へ来書

別後各位益御安康御勉務奉萬賀候
叔小弟来る五日午後五時横濱港にあり
て本艦天草丸へ乗り込と同日第八時
に發錨七日午前第十時神戸へ上陸致
し大隊長有馬三等大警部不隨ひ上
京内務卿へ拝謁本隊宇和島表へ出張

の命と蒙り即日飯坂尚西郷陸軍中將へ
有馬大隊長より万事問合せのうへ九日
午後第六時神戸港みてマゼリヤ号へ一
隊乗り込と同夜第十一時發艦十二日午
後第六時伊豫より宇和島へ上陸し本町
居村安兵衛方へ尚本營を定められ隊中
みへ各寺院へ屯集し自今當地鎮靜聊り
懸念念るし併し豊後鶴崎および臼杵等

官軍日向
大隅の間
ふ攻撃す



よりと海路接近の港ふも之り有り賊徒
何時侵入候りんやも計りがとく且つ土州
ハ最も海路接近の儀又つき海陸そのハ
方へ哨兵線と設けなき候當表ハ如何
も僻地にて電信ハ素より断絶或ハ郵便
又至るまゝ不便にて九州戦地勝敗さ
らにあり分らず殆ど困却此事ハ候這回
出張の一隊臨時召募とりんども各警視

規則を導奉一および隊長の命に違ふも
のみに至て整頓兵ふ有之此段御安意下
され度先ハ早々

六月十四日

粕谷司馬雄

警視官宛

今回陸軍砲兵本廠の管轄東京青山火薬庫
より弾薬五百三十輦銭瓶橋の火薬庫へ過
日積送りより夫より品川沖の本艦へ積

込んで戦地へ廻されたりといふ

同十六日あゝ官軍ツウグ坂峠より三國峠峯筋

各處の要地へ壘を設け防禦を嚴ふす逆兵

の旗返より大石峯筋カシの峯まで要地々

へ堅固あり壘壁を十六ヶ所設けより官

の壘より賊壘へ近きハ八百ヤルド遠きハ千

二百ヤルドあり同日午前七時より官

軍頻り進撃し攻立し近寄りし折しも逆

徒ハ此所彼所より顕れ出づ破竹の勢ハ官

軍と邀撃しちし砲發し兩軍暫時是れ戦ふ

官兵ハ三國峠筋へ大砲二門を据へ砲撃す又

賊よりも連發せしその砲聲空に轟き恰も

霹靂の碎けて落るが如くあり官軍

ハ之ハ數度應撃し大石の賊壘へ七発的中

死傷夥多ありけりと思ふ官軍の砲兵即

死一名手負一名あり同十七日戦事ハ

鷺谷村へ宿陣の官軍昨十六日午後十二時
出足今十七日午前二時でろ官軍の前鋒二
十五名銃槍を伏せ枚を衝んで三國峠の東南
るる犬石の賊壘を襲撃す賊狼狽して壘
と棄て敗走す官軍惣勢進撃す賊徒は之
を邀撃すち各抜刀ふる狂獅憤虎の威を振
ひ右横左横へと切て廻るを官軍は是を物の
かずともせむ一時又十七八ヶ處の賊壘を拔

き陣小屋に放火せしが賊徒は必死の猪武者
るれを斯くてハ果トと士官等へ自く真先
又進んで撃つや進めの喇叭の声共又雷神の如
く大喝一声又兵士を励まし近寄る敵へ各
刀を揮ひ之れを切て落し或ハ大砲小銃を連
發したる又流石に猛り立たる賊軍も防戦す
の術もなく浮足するつゝ宇目谷を指濱走す
る賊徒十二名とバ銃槍よて指殺す傷者分明

なぐ生捕二名あり小銃二十餘挺彈藥并に
刀數十本分捕せし同十七日ふら鹿兒嶋縣士
族羽瀬孝内降伏し去る十五日隊長瀧七之
進ハ諸兵を佐土原大土間里に引率する所
を相野の命にて再び出兵すまゝ大分縣下
へ侵入したる逆徒ハ追々敗走し悲愴日向
とさし引き退きその中ハ生擒となり
降伏を軍門に請ふの類めりとも多々ある

大分饑たる氣色ふり力盡たる逆徒ハ銃砲も
十分あらず百人の中二三十人あらずハ携帶
ことと得ぬ位ある遂に此の拳に至りしと降
伏の者よりいへるより賊の病院に
踊、横川、栗野、加久藤、飯野、小林、吉田
高岡、勝岡、眞幸、吉根
既ハ過日以來掲載たる賊軍竹田近傍より
佐伯へ退走せり官軍一手ハ三重市出陣



郷田芳豊
後路みあ
つゝ官軍
へ降伏す



一、佐伯口を防ぎ一手へ玉来口より一、
すんで鳥越茶屋辻山手等へ進まうと松の
木小中尾平村等へ陣と一、古城の賊と戦
ひしが賊へ遂に敗走し竹田へ退きたれど
該地の曩々官軍の放火は罹りて大に便利
と失ひたれば久しく爰にも支へ兼たりと一、
不日して引退き一と一、

一説は重岡は落止り一賊へ西女地は扱て

官軍と暫く對峙したれども彼の威焰
ハ衰へ我ハ漸次ハ奮ふみよりて降を請
ふもあり遁走するものあり遂に全くと
潰走して方今賊徒のあととたちと
抑縣下の士族の中岡ハ過半賊と與と
一臼杵の士族概數千五六百人ハ賊の脅
迫を拒と一為に害を被りしも少あり
らずといふ岡士族平民よりて賊に應ぜ

一とこのあつひに捕はれ或は自首し
當時城中七里藏み押籠られしもの
一番藏入永峯文次を始しめ十三人二
番藏入大野熊次を始しめ二十八人三
番入三宅松太郎を始しめ二十八人四番
入鹽山次郎を始しめ二十六人五番入
三本文造始しめ十七人六番入高野静
藏始しめ十八人よて総計百三十人な

り又自首ふよりて區長へ保管せられ
し横田眞臣を始しめ百七十三人よて其
餘猶後れて自首せし二百八十三人
あり

まゝ六月十八日官軍三國旗返の二嶮を拔
き賊徒ハ重岡を保さんぐ為め該駅を去る
こと半里計りの場所ハ數壘を設け防戦
せんとす既し野津大佐の全軍ハ此の地ハ

去る十六日より滞陣堀口奥の諸軍同線と
出づると待つ蓋し野津の一軍進んで重岡
と抜き難きとありず然れども佐伯口横
川急の賊とて退くは處るくくむれば
必ず他の一方又突出するの虞あるを以て
ゆるは進撃を緩りあり他の二軍進むと待
つて氣ふ乗じて重岡を屠らんと決せしもの
の如し三日の休戦兵氣鬱動一報ありて重

岡を抜き長驅して日向路に入るの勢ひ斯く
てまゝ豊後地方へ敢て憂ふべきことなく同
十七日曉三國峠の險と乗取りたり旗返に三國
の陷を嘆き戦はずく潰走せり賊徒の小隊
長郷田芳降伏旗返へ進撃の前より尤も
分捕の銃器等ありて多くはコンピール銃と
しく稀に火縄筒ありて弾薬箱の中は泥
土を詰り人夫は擔いせしもあり蓋し虚勢を示
せんが為め此ノ

やまぐささんぐんま
 山縣参軍嶋
 津家令み命
 トて邸と病
 院お設し受る



計畧を以て賊徒狼狽遁走し曾て知音の者を雇
ひ重岡以南の動静を探偵し官軍の進む
随ひ日向ふ入ると要せり然れども重岡口の
攻撃手を急速うらざる模様又至らば一旦大
分へ出張し再び重岡又来らんとす又鹿兒
島の賊徒は各所の砲壘より破列砲を發射
しその砲声山海を鳴動す縣廳病院その他
へも毎々達して是が為め又病院中にて即死

するもの多しありしを山懸參軍の病院中
を巡廻して醫員に注意せしが日夜の連發病院
棟は彈丸破列衣して傷多ければ山懸參軍の病
院を櫻島へ轉せんとして彼是場所と取り調べら
れしは舊知事島津公の立退き場の外ふを
病院に假用ふべき場所無きゆゑその段を掛
合ふありしは島津家の種々故障されされ
ども他は病院の場所もいふえあつたりなく

よんどころなく強く挂合られ漸立退場と
受け取り建築棟の数を二三ヶ所増加し
て各入院せられしとあり
島津久光公より今回の戦争ハ一先休戦及
び各國の公使の決議に任せて然るべしと
云ふ建言をせられ高知縣の板垣氏も同論
ありとあり説なるより同縣より護送せし
兩名の藤好村松を西京におく六月十九日

小島問よりありと云ふ同二十日官軍の大
候を阿久根へ向け差し出し既ち賊壘を
かんち攻め立て近寄り折々賊より發
砲し官兵奮撃突戦し互に火花を散
らし戦ひしが終に賊壘を棄取り賊徒
と六七人斃す賊死骸を棄て退く銃器若
干分捕たり同二十一日より二十二日
阿久根へ進撃の爲め昨夜中野田の暗兵線

兵を進め、午前第三時三十分進撃
阿久根の手前本道あり、左翼の賊墨
を陥し入れ、官軍破竹の勢ひを振ひ、阿久
根は攻入り、勇進猛烈あり、どぞ流石の賊兵
も撃ち立ちられ、敗走し西方を指し、
潰散する。官軍尾撃し、阿久根と過る
こと凡そ一里計り、至り往還の左右の山
を據り防禦する賊と直ちに進んで之を

追落せり。官軍は此賊徒をバ壘粉ふる、呉んぞ
と頻り奮戦し、居たり、ところへ追々援軍
繰込、これを速うは是より追撃さべしと令する
や否、官兵は今や背後を襲ひ、賊と一人も餘
さず討留よし。鯨波と発し、遂に同日午後六
時ころ至て、賊軍敗走して逃趨りたり。生捕凡
八九人、賊の死骸十人餘分捕、砲二門外、砲車臺
輪共銃器數十挺、官軍死傷凡二十人あり。同廿

四日日向の勝地村に進撃す。二十五日天明に勝地
 峠の激戦に賊徒の峠の山口と断ち官軍頗る
 苦戦して午後八時佐伯は居る二中队が繰込
 大に奮ひ同廿六日再び勝地峠と占む官兵五
 十名程討死せりと云ふ

西南鎮靜記三編卷之上 終



